

架け橋プログラムと架け橋期の カリキュラム実施についての3市の実践

～3市の実践を自身の取組にいかしてみませんか？～

ふくしま幼児教育研修センター

本実践研究は、幼児教育の質の向上と幼小連携の充実を目的に、令和5年度から3年間の取組として実施しています。本年度は研究の3年目に当たります。モデル地区の設定については、県内を浜・中・会津に分け、その中から南相馬市、田村市、喜多方市を指定させていただき、これまでの各市での取組を基盤にして取り組んでいただいております。

本報告書は、モデル地区3市の取組について一部を抜粋して紹介する形でまとめました。本年度は、**架け橋プログラムの実施**や**架け橋期のカリキュラムの実施・評価・改善**に関する取組を重点的に掲載しています。(各地区が本年度実施・改善したカリキュラムについては本報告書の巻末に掲載)

架け橋プログラムの実施や架け橋期のカリキュラムの実施・改善・評価に関する取組、作成した経緯、特徴は3地区とも異なります。本報告書を御覧になった県内各地の幼児教育施設や小学校、市町村行政に関わる方々には、モデル地区における取組の中から、御自身の取組に取り入れられそうなことがあれば積極的に取り入れ、架け橋期の教育の充実につなげていただければ幸いです。



【用語について】

幼 小 連 携

幼児教育施設と小学校との連携のこと。

連携する幼児教育施設は、公私立の別、施設種を問わないものとして
いる。例えば、「幼小連携」と表記していても、保育所や認定こども園
も含んでいる。

ふくしま幼児教育
研 修 セ ン タ ー

県庁内3課（私学・法人課、子育て支援課、義務教育課）が連携して
令和5年4月に設置。公私立の別、施設種を問わず、県内全ての幼児
教育施設の保育者に対する研修を一元的に実施している。

令和7年度 喜多方市における取組

I はじめに

本市には、公立のこども園10園、私立の幼稚園2園、こども園1園、保育所10所、公立の小学校16校がある。

【架け橋期のカリキュラム作成経緯】

令和6年度よりモデル地区2年目の取組として作成した。作成の主体となったのは、公立こども園、私立保育所及び小学校の管理職など、保育者や教員からなる「架け橋期カリキュラム推進委員会」である。作成する過程で、幼児教育施設間の相互理解、幼児教育施設と小学校との相互理解が図られていった。

【架け橋期のカリキュラムの特徴】

本市では目指すこどもの姿を、市の人づくり指針「なかよく たくましく 生きる」とした。サブテーマを「みんなと力を合わせ、よりよい生活の場をつくる」とし、10の姿では、「協同性」に対応する。

カリキュラムの作成自体が目的ではなく、幼児教育と小学校教育との相互理解が図られ、円滑な接続を意識できるように、各幼児教育施設や小学校の教育現場で活用することを重視し、内容を精選した。特に、年長の3学期から1年生の1学期までの関わりが重要であることを強調し、その時期の保育者・教員の関わりについて、具体的な言葉がけの例も明示した。

II 幼保小の架け橋プログラムの実施状況について

(1) 園同士の連携（よこの連携・協働）

【私立園と公立園の横のつながり】

公立こども園から私立園へアプローチする形で、公立こども園と私立園との園児同士及び保育教諭同士の交流が行われ始めている。公開保育や各種研修会など、モデル地区での3年間の取組を通して、公立こども園と私立園の職員同士の交流が生まれ相互理解につながったこと、各園での幼児教育の充実が図られたことが大きな要因である。幼児教育施設同士の交流が、園児の成長や新しい姿の発見、他者への気づきを促していることを、交流後の振り返りを通して教職員が実感できているので、取組が継続するとともに広がりを見せている。

また、私立園同士でも研修の機会を設けたり、園児同士の交流の場をもったりするなど、横の連携が広がっている。



(2) 園と小学校との連携（たての連携・協働）

【幼児教育施設と小学校の縦のつながり】

幼児教育施設が横の連携をもったことは、複数の園との交流を複数回にわたって実施してきた小学校にとっても、幼小連携の有益性をより感じられるようになった。交流の回数を精選することにより、保育者と小学校教員が、事前に交流のねらいや準備物等について打ち合わせをしたり、事後の振り返りを行ったりすることができるようになった。また、子ども同士の交流を通して、小学校の教職員が児童の成長を実感できたことも、幼小連携への積極的な取組につながっていた。



今後は、年間を見通した持続可能な幼小連携を目指し、各園・各小学校で、交流活動等を次年度の教育課程等に位置付けるとともに、架け橋期のカリキュラムを活用した幼小連携の好事例を発信することによって啓発を図っていきたい。

(3) その他の架け橋期の教育の充実を図る取組

【保護者や地域への幼児教育理解促進】

各園ではドキュメンテーションを通じて、保育の内容だけでなく、活動のねらいや園児の姿の変容を保護者に発信している。公立こども園では、地域住民を含む委員からなる学校関係者評価委員会を年2回設け、各園での取組を委員に報告するとともに、委員との意見交流を通して、幼児教育の特性の理解を深めている。地域の行事に園が積極的に参加することで、幼児教育への理解を図っている。

今後は、地域の方を対象とする保育参観を実施し、実際に保育の様子を地域の方々に見ていただき、管理職が保育のねらいや意図を伝えることで、地域の方々にも幼児教育への理解を図っていきたい。

Ⅲ 架け橋期のカリキュラムの実施・評価・改善に関する取組について

(1) 実施状況

【架け橋期のカリキュラムからスタートカリキュラムを見直す】

幼児教育・小学校教育担当者連携研修会を年2回実施し、架け橋期のカリキュラムを用いて、幼児教育と小学校教育の相互理解を図った。第2回の研修会では、架け橋期のカリキュラムを用いて、各小学校のスタートカリキュラムを見直すと共に、次年度に向けた幼児教育施設同士の横の連携や小学校との縦の連携についての方向性を話し合うことができた。架け橋期のカリキュラムをスタートカリキュラムやアプローチカリキュラムを見直す際の視点として活用できることを示すことができた。



(2) 評価・改善に関する取組

【確実な実施から得たものを還元する】

今年度は架け橋期のカリキュラムの周知に重点を置き、幼小の研修会を実施したり、架け橋期推進委員会において活用の在り方について検討を重ねたりしてきた。第4回の架け橋期推進委員会では、次年度に向けた架け橋期カリキュラム記載項目の見直しや活用方法について意見交流を行った。記載項目について、自園・自校化しやすいように、具体的な活動内容や地域との連携等を追記できるように、様式の修正を検討していくことや架け橋期のカリキュラムを用いてスタートカリキュラムを見直していく研修会を次年度も開催し活用を図っていくこと等の意見が出された。



今年度の周知を経て、次年度は評価・改善に視点を当てて、自園・自校化につなげる取組を行っていきたい。

IV 成果と課題

成果

- 架け橋期のカリキュラムへの理解を深めることで、幼児教育と小学校教育の違いに対する相互理解につなげることができた。
- 架け橋期のカリキュラムに基づいたスタートカリキュラムやアプローチカリキュラムの見直しを行ったことで、それぞれの時期に目指す子どもの姿から、遊びや活動の内容、保育者・教員の関わり方の改善や充実につながった。
- 幼児教育担当部局と合同で架け橋期推進委員会を開催することで、私立園への啓発を図ることができた。

課題

- 架け橋期のカリキュラムの活用に向けて、見直しの視点に加え、自園・自校化への取組を推進していく。

令和7年度 田村市における取組

I はじめに

本市には、公立の幼稚園3園、こども園2園、保育所2所、私立の認定こども園1園、保育所1所、公立の小学校7校がある。

【架け橋期のカリキュラム作成経緯】

本市では、モデル地区に指定される以前より、保幼小合同の研修を継続的に実施していた（連携推進委員、小学校教諭・公私立園保育者対象）。その中では、幼児教育の充実に向けた「園内研修の充実」「遊びの充実」についての協議・講演や、幼小連携の実践発表、架け橋期カリキュラムについての協議がすでに行われていた。

モデル地区1年目（令和5年度）には、各小学校が実践していたスタートカリキュラム、田村市公立幼稚園共通カリキュラム（共通カリキュラムを基に、園児の実態・園の特徴・地域性を考慮しながら、必要事項を付加し各園で作成したもの。市内各小学校、保育所、私立園に提供し、田村市の幼児教育の充実を図る。）を再共有するとともに、保育所での公開保育を実施するなど幼児教育の充実を図った。

モデル地区2年目（令和6年度）には、田村市版架け橋期カリキュラム作成に着手した。作成の主体となったのは、「保幼小連携推進委員会（公立幼稚園・こども園・保育所、私立園、小学校の管理職など保育者や教員からなる）」である。架け橋期で目指す子どもの姿の共有からスタートし、その後、具体的な子どもの姿や環境構成の工夫などについて協議を重ねた。作成する過程では、子どもの姿を通して話し合いを重ねたことで、幼児教育施設間の相互理解、幼児教育と小学校教育との相互理解が図られた。

【架け橋期のカリキュラムの特徴】

- ① 「主体的に学び、表現できる子ども」を育てるための環境構成及び教師の意図
 - ・ 架け橋期で育てほしい姿を「主体的に学び、表現できる子ども」と設定し、その実現に向けて、園・小学校で取り組む環境構成を意図とともに明記した。
 - ・ 園での「遊びを通した学び」と小学校の各教科の学びのつながりを可視化し、架け橋期の教育環境（場の設定、道具の配置等）の工夫を具体的に明記した。
 - ・ 小学校においても、幼児教育の環境構成を参考にして、1年生の教室環境を工夫できるように、実践的な環境構成の工夫が盛り込まれている。
- ② 地域の特徴を生かす（中学校区ごとに作成）
 - ・ 3年間の取組を経て、市全体の「架け橋カリキュラム」を共通指標とする段階から、各施設が自園・自校の計画を具体的に落とし込む「自園・自校化」が進んだ。中学校区ごとに作成する箇所を設けたことにより、地域ごとの特色を反映したカリキュラムとなっている。また、「自園・自校化」が図られたことで、教職員及び子どもの交流時期が明確に記載されているため、架け橋期の取組が教育活動の一環として確実に組み込まれ、各施設の主体的な実践につながっている。

II 幼保小の架け橋プログラムの実施状況について

(1) 園同士の連携（よこの連携・協働）

【公立の枠を超えた合同研修の実施】

公立私立保育園・幼稚園・こども園教諭・園長、小学校教諭・校長、行政担当者が一堂に会する、保幼小連携推進に関する会議を年8回開催している。保育・交流活動の実践公開を通して、各園や小学校の取組を共有し、自園・自校での教育の充実につなげた。また、子どもの実態や実践の成果と課題を共有し、架け橋期のカリキュラムの内容を検討するなど、円滑な接続に向けて研修や情報交換を行っている。

(2) 園と小学校との連携（たての連携・協働）

【子どもたちの交流（合同行事、交流会の実施）】

中学校区ごとに合同行事や交流活動を計画的に実施している。常葉中学校区では、園児の遊びから小学生との混合チームでのドッジボールに発展し、作戦会議を通じて思考力や人間関係を育んだ。幼小合同運動会を実施する地域では、実施に向けて事前交流を行い、小学生は園児を思いやりながら活動に取り組み、園児は小学生の応援を受けながら運動を楽しんだ。



【自然発生的な日常での交流（併設園）】



幼稚園と小学校が併設・隣接している利点を生かし、休み時間における日常的な交流が定着している。滝根幼稚園・小学校では、校庭や園の教室で小学生と園児が思いのままに一緒に遊び、互いの存在が身近なものとなっている。こうした自然な関わりが、園児の小学校への憧れを醸成し、入学後の安心感に寄与している。また、小学生が自主的に園の教室の掃除に訪れるなど、年下を思いやる気持ちも育まれている。



【職員間の交流（保育・授業参観、情報交換会、保育ドキュメンテーションの活用）】

保育・授業の相互参観や交流活動での事前・事後の話し合いを通じて、教職員が互いの教育について理解を深めたことで、架け橋期の学びの連続性が図られた。中学校区単位での協議を重ねたことで、職員間の連携や情報の共有がスムーズになった。園がドキュメンテーションを小学校に共有するようになった地区では、小学校教員が園の環境構成を自校の教室作りに取り入れたり、授業に園での遊びの経験を生かしたりするなど、円滑な接続の具体的実践につながった。



(3) その他の架け橋期の教育の充実を図る取組

【地域ごとに、地域探検（近隣公園や公共施設の利用）やイベントへの参加】

都路地区では、こども園・小学校が地域の灯まつり・盆踊り大会に参加し、幼児はダンス、小学生は地域伝統の太鼓演奏を発表した。園では、この経験から遊びが「お祭りごっこ」に発展するなど、地域ならではの経験が主体的に遊ぶ姿につながった。地域の方々にとっては、子どもが生き生きと活躍する姿を見る機会となり、地域全体で子どもを育てる意識の醸成につながっている。



【学校支援ボランティアを活用した体験活動の充実】



ボランティアによる読み聞かせや昔遊び体験、焼き芋、お団子さし、しめ縄づくりなど、多様な大人との関わりを通じた遊びや学びを展開している。地域ボランティアコーディネーターの協力を得てボランティア配置を行い、小学校に関わるボランティアが園の活動にも携わっているため、子どもたちは安心して学べる環境で学びを継続することができている。

【地域ぐるみでの児童・園児の見守り（登下校時の交通指導、家庭教育支援活動）】

交通安全協会や警察、PTAと連携し、登下校時の街頭指導や安全指導を地域一体で実施している。消防立ち合いの下、幼小合同避難訓練を実施し、災害時も含めた見守り体制が強化されている。

家庭教育支援活動を通じて、幼児教育の重要性を保護者に啓発し、地域全体で子どもを育てる意識の醸成を図っている。



【ホームページ等を利用した情報発信】

小学校では、幼小交流の様子や関係者会議の様子など、連携の取組をホームページで積極的に発信している。園ではドキュメンテーションを活用し、保護者に向けて視覚的に分かりやすく園での様子を紹介しており、保護者からは「子どもが遊びの中でたくさんのことを学んでいることが分かった」と好評を得ている。また、学校運営協議会で「架け橋期カリキュラム」を共有し、幼児教育及び架け橋期の学びの接続の重要性を地域に発信している。



Ⅲ 架け橋期のカリキュラムの実施・評価・改善に関する取組について

(1) 実施状況

【カリキュラムに基づいた意図的な教育実践】

3年間のモデル地区としての取組を経て「田村市架け橋カリキュラム」が策定され、実践を通じた見直しが行われたことで、次年度以降の本格的な活用に向けた基盤が整っている。また、交流活動を行う際、園と小学校の間でカリキュラムに沿って活動のねらいや方法を話し合うことで、単なる交流イベントではなくねらいをもった交流活動へと質的向上が図られた。

小学校では、園での遊びの経験や環境構成（場の設定や道具の置き方など）を、自校の教育活動及び環境に取り入れようとする意識が高まり、実践につながっている。

(2) 評価・改善に関する取組

【カリキュラムの実践及び見直しの継続】

現行カリキュラムの具体的な見直しについて協議を行い、現場の実態に即したブラッシュアップを図った。これにより、中学校区ごとに、前年度のうちに次年度の計画を作成する体制を構築することができているので、カリキュラムの実効性を高めるための計画的な運用につながっている。

<各中学校区で協議されたカリキュラムの主な修正内容>

- ・ 互恵性のある交流活動にするための時期の見直し
- ・ 成果が見られた実践を基に、さらに学びを深めるための新たな交流活動の導入
- ・ 架け橋期のねらいに沿った活動にするための活動内容の変更

保幼小連携推進委員対象のアンケートでは、「次年度の委員会で充実させてほしい内容」に関する設問において、「架け橋期カリキュラムの継続的な改善」を重視する意見が多く挙げられた。また、カリキュラムそのものの検討だけではなく、公開保育等を通じた実践的な交流や研鑽を継続しながらカリキュラムの見直しを重ねることで、実践の成果・課題を次年度以降へとつなげていこうとする委員も多い。今後も継続的なカリキュラムの実践及び見直しをするための機会が必要である。

IV 成果と課題

成果

○ 保育者や小学校教員の指導の改善・充実

中学校区単位での協議により小学校と幼児教育施設の垣根が低くなり、職員間の連携や情報の共有がスムーズになった。交流活動においては、事前事後の話し合いを充実させることで、それぞれの子どもにより適した交流活動を実施することができた。

○ 5歳児や小学校1年生にとっての安心や学びの充実

継続的な交流により、職員同士が子どもの育ちを共有することで、園児が安心感を得てスムーズに小学校へ入学できている。また、子どもたちには、年上の子が年下の子を思いやるなど「相手意識」が芽生えている。

○ 教育委員会と幼児教育担当部局との連携

推進委員会という枠組みを通じて、行政（学校教育課・こども未来課）と各施設・学校が一体となって事業に携わる体制が構築されている。

課題

● カリキュラムの継続的な見直し

今年度協議された「活動時期の見直し」や「新しい活動の追加」などを、次年度の実践に確実に反映させ、検証する必要がある。

● 地域への啓発活動の強化

幼児教育の遊びを通じた学びの重要性が、小学校での学力形成等にどのように繋がるかについて、さらに分かりやすく家庭・地域へ発信していくことで、地域全体で子どもの育ちを支える体制につなげたい。

令和7年度 南相馬市における取組

I はじめに

本市には、公立の幼稚園3園、保育所2所、こども園1園、私立の幼稚園1園、保育所5所、こども園4園、公立小学校11校がある。

【架け橋期のカリキュラム作成経緯】

令和3年度から行っている「幼小連携接続研修会」において、令和6年度のテーマを「小学校教育と幼児教育の相互理解」とした。その取組の中で、保育者と小学校教員が相互の教育内容や指導方法について理解しづらいことが課題として挙げられたため、相互理解を図るためにカリキュラムを作成することとした。

【架け橋期のカリキュラムの特徴】

5歳児と小学校1年生の2年間だけでなく、0歳児からの発達の連続性を考慮し作成した。

公立幼稚園及び保育所が合同で作成・活用している0歳児から5歳児までの長期の教育計画（期のカリキュラム）に示している期ごとのねらいを取り入れ、架け橋期前の発達段階も丁寧に記載した。

II 幼保小の架け橋プログラムの実施状況について

(1) 園同士の連携（よこの連携・協働）

【公私立の別なく学び合う機会】

年間計画に位置付けた全6回の公開保育を実施するに当たっては、私立園を含む全ての幼児教育施設に案内を出し、参加していただいた。午後には協議を行い環境設定や保育者の援助について意見を出し合った。

市が実施する研修会にも全ての保育者が参加できるようにした。園内研修リーダー研修をはじめ、リトミックや楽器あそびなどの実技研修、危機管理研修、実習生の受け入れ研修を含むマネジメント研修など様々な内容で実施した。研修会では、公私立の保育者が積極的にコミュニケーションを図りながら取り組む姿が見られた。



(2) 園と小学校との連携（たての連携・協働）

【南相馬市の目指す子ども像について話し合う機会】

市内全小学校の1年生担任と市内公私立の幼児教育施設の5歳児担任が年間3回顔を合わせて、幼小連携や架け橋期のカリキュラムについての話し合いを行った。カリキュラムについての話し合いは中学校区でグループを編成して実施した。回を重ねるごとに保育者と教員同士の関係性が深まり、率直に意見を出し合うことができるようになっていった。



また、園から小学校に指導要録や支援シートを提出する日を年度当初に決めておくことで、担当者間で確実に引継ぎを行うことができた。

(3) その他の架け橋期の教育の充実を図る取組

【保護者・地域への啓発】

公立の幼稚園・保育所・認定こども園が実施する保護者向けの保育参観の際に、保護者に対して「架け橋期」について30分程度説明をし、幼小連携の取組について理解を促した。

また、5歳児と小学校1年生の学びのつながりについて示したリーフレット「架け橋期の育ちをつなぐ」を作成し、就学時健診の際に配布した。



Ⅲ 架け橋期のカリキュラムの実施・評価・改善に関する取組について

(1) 実施状況

【作成から共有・実践へ】

架け橋期カリキュラムに示されているその時期の「ねらい」と「配慮事項」を参考にしながら、交流活動の事前カンファレンスを行った。事後カンファレンスも実施し、「ねらい」と「配慮事項」の視点で振り返りを行った。このことにより、「交流活動で何を行うか」だけでなく、「何をねらうのか」、「子どもの学びを豊かにするためにどのように支援するのか」について考えることができ、幼小共に充実した交流活動を行うことができた。



交流活動直後には、幼児が小学生に教えてもらったことを遊びに取り入れる姿も見られた。

(2) 評価・改善に関する取組

【教育課程への位置付け】

交流活動の前後に実施したカンファレンスの中で、カリキュラムに記載されている「配慮点」以外にも、子どもの実態から必要と思われる配慮点について話題となった。年度末には、カンファレンスの際に挙げられたことについて中学校区ごとに整理し、カリキュラムの改善を行った。また、各園・小学校の次年度の教育課程等の中にも位置付け、継続的な取組となるようにした。



IV 成果と課題

成果

- 保育者が1年生の授業参観を行ったり、交流活動のカンファレンスを行ったりすることを通して、小学校の指導方法や授業の内容を知ることができたので、小学校の学びを見通した指導を行うことができるようになった。
- 小学校教員が保育参観をし、子どもの姿を基に幼児期の学びについて話し合ったことについては、「幼児教育で実際に何を行っているかを知れたことは、今後の授業の改善に繋がる」などの感想があった。
- 交流活動の際に事前事後のカンファレンスを行うことで、交流活動が回を重ねるごとに充実していった。小学生が自分の知っていることを年下の子にわかるように伝える姿や、5歳児が自分の分からないことを1年生に質問する姿が見られた。

課題

- 架け橋期のカリキュラムを実施することで、保育者同士や保育者と小学校教員の相互理解が進み、子どもの育ちを大切にしたい関わりができるようになってきた。今後は、架け橋期の取組を保護者や地域の方々とも共有し、園や学校外でも子どもの育ちを支えていけるようにしたい。

- 喜多方市総合計画
～きたかた活力推進プラン～
- 喜多方市教育振興基本計画
～地域を支え未来を拓く人づくりプラン～



○ 福島県幼児教育振興指針
～「遊びを創り、たくましく、共に育つ子ども」～

【幼児教育】～学びの芽生え～
○経験重視「感じる」「気付く」「工夫する」「興味をもつ」「関わる」
○遊びを通した総合的な指導
◎10の姿を念頭に置きながら、小学校以降の生活や学習の基盤となる資質・能力の育成

この違いに子どもたちが「ゆるやかに」馴染めるように、幼小が互いを理解し合おう！相互理解に基づき、指導方法を見直そう！

【小学校教育】～自覚的な学び～
○到達度重視「できるようになる」「わかるようになる」
○教材（教科書）による授業
◎10の姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼児期に育まれた資質・能力を踏まえて、教育活動を実施

5歳児

特にこの時期が重要！

小学校1年生

4・5・6・7

8・9・10・11・12

1・2・3

4・5・6・7

8・9・10・11・12

1・2・3

期待する子ども像

○自ら心を動かして遊ぶ

やってみたい

○友達や先生と話し合っていて
づく・学ぶ・深める

つなげる・深める

○お互いに刺激・協力し合って
やり遂げる

みんなと一緒に
もっと楽しい

○新しい環境に徐々に慣れ、少
しずつ友達を増やしていく

安心・わくわく

○自分らしさを発揮し、学ぶこ
とへの興味・関心を広げる

自信・意欲

○友達と話し合いながら試行錯
誤し、工夫して学習する

学びに向かう基盤

内容（共通に行う遊び・活動）

○やってみたいことを試行錯誤
しながら繰り返し楽しむ
○身近な人と関わりながら興味
のある遊びを楽しむ

○遊びの中で、自分の思いを
実現する喜びを感じる
○友達と一緒に話し合いながら
遊びや活動を進め、失敗しても
次につながる経験の積み重ねを
繰り返し楽しむ
・運動会
・収穫祭（芋ほり）
・クリスマス発表会

○友達や多様な人との触れ合いを楽しみながら、もっと楽しめるように工夫する

○いろいろな友達と遊ぶことを
通して、協力することのよさに
気付く。
・グループやクラスで役割分担
のある遊び
（子どもたちの主体性を阿智節に！
○園生活を振り返り、自分の成
長を自覚するとともに、友達
のよさに気付く。
・「楽しかったね！○○園」
（言葉やその他の方法で表現を！）

保育者も！

○期待をもちながら新しい友達
と生活や学習に取り組む。
・1年生を迎える会
（園で経験したことを無理なく！）
・「ときどきわくわく1年生」
（安心感を引き出す関わりで！）
・縦割り活動
（子ども同士の関わりを大切に！）

スタートカリキュラム
共通理解と確実な実施

○めあてに向かって、友達と協
力しながら学習する。
・学習発表会
・「たのしい秋いっぱい」

他学年の担任も！

○友達と話し合いながら試行錯
誤し、工夫して学習する。
・「冬を楽しもう」
・新しい1年生を招待しよう
・「1年間を振り返ろう」
・「大きくなった自分を見つめ
よう」

環境構成（もの・ひと・時間・空間）

○季節やこどもの興味・関心に
合わせた柔軟な環境づくり

○友達・異年齢・地域など多様
な人とも自然なやりとりができ
る環境づくりや遊びの充実

○十分に遊びを発展できる環境
・遊びの発展を保障する時間、
子どもの思考を持續させる空間
○園生活の楽しさ、成長を実感
できる環境、小学校への期待

○安心して楽しく生活できる環
境
○スタートカリキュラムに基づ
く無理のない時間割

○自信や意欲をもって学習に取り
組む環境
・意欲を引き出す導入、成長を
感じられる振り返り

○1年間の成長を実感できる場
の設定
○2年生の学習や生活への意欲
を高める工夫

学習形態の工夫（ペア、グループ、コの字型）

保育者・教員との関わり

○肯定的で受容的な関わり
・活動の理解者
○それぞれの思いや気付きを認め、つなげる共感的な関わり
・共同作業者
・遊びの援助者
・憧れを形成するモデル

○充実感・達成感につながる関
わり
・「いいアイデアだね」
・「自分たちで工夫したんだね」
・「みんなと一緒に楽しだね」
・「小学校でも使えそうだね」

○安心感を引き出す関わり
・「園でやったことある？」
・「園と比べて違うかな？」
・「みんなができるの知ってるよ」
・「○○さんのいいところ見つけたよ」

○自信や意欲を引き出す関わり
・ほめる、認める、受け止める
・信じる、見守る、共感する

○成長の自覚を促す関わり
・1年間の成長に気づき、自信
をもたせる
・進級の喜びを感じさせる場の
設定

○「何でもできる1年生」として関わる ○安心して学習できる雰囲気づくり



主体的に学び、表現できる子ども



年長 5歳児

小学校1年生

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

育ってほしい姿	《年長児としての自覚》 年長になった喜びと自覚をもって、園生活を楽しむ	《学びの芽生え》 気の合う友達と試したり、工夫したりして遊ぶ	《非認知能力の向上》 共通の目的で取り組む活動や行事を通して友達と力を合わせ、個性を発揮しながら遊びを楽しむ 活動や生活に見通しをもち、その実現の過程で充実感や満足感を味わう	《自覚的な学びの芽生え》 小学校生活に関わる活動を通して幼児期の経験を生かしながら楽しく安心して遊びや学習をする	《学びへの意欲》 小学校生活や学習に見通しをもって取り組み、生活や学習をする	《挑戦》 友達との関わりの中で相手の考えも受け入れながら自分の考えを表現し、意欲的に生活や学習に取り組む	《意欲の高まり》 自分や友達の成長に気付き、相手の気持ちを考えながら、自分の考えを表現し、自信をもって生活や学習をする	《成長の自覚》
	幼児期の経験を生かす							

〇幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)と教師の関わり

〇10の姿を紡ぎ高める1年生の学習と教師の関わり(例)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導を工夫することにより、幼児期に育まれた資質能力を踏まえて、教育活動を実施する。

(1) 健康な心と体

- 〇生活に必要な技能獲得のための活動設定や励まし
- 〇体を動かす心地よさを感じる活動設定

(6) 思考力の芽生え

- 〇試行錯誤、工夫することの称賛
- 〇ものの性質や仕組みに気付く活動設定

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

- 〇数や形、文字などに触れる活動設定
- 〇数量や図形、標識や文字との関わりを深める活動設定
- 〇数字や文字の役割に気付く場面の共有

(9) 言葉による伝え合い

- 〇動作や言葉で伝えようとする活動設定
- 〇言葉のやり取りを楽しむ姿を認め励ます
- 〇相手の話に興味をもって聞く声掛け

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

- 〇相手の気持ちを受容することの必要性がわかる声掛け
- 〇自分の行動を振り返る場の設定
- 〇自己主張のぶつかり合いの補助や見守りと声掛け

(2) 自立心

- 〇あきらめずに取り組めるように励まし続け、寄り添う
- 〇やりたいことを選んで行動できる環境設定
- 〇考えたことを試すことができる適切な環境設定

(3) 協同性

- 〇共通の目的で取り組める活動設定
- 〇お互いの思いを共有する活動設定や声掛け

(7) 自然との関わり・生命尊重

- 〇自然の変化を感じる活動設定
- 〇自然を遊びに取り入れる
- 〇命あるものを大切に扱う行動を認め励ます
- 〇生き物に適した関わり方ができる環境設定

(5) 社会生活との関わり

- 〇家族や友達、地域との関わり
- 〇地域・保護者への情報発信と収集
- 〇公共施設や地域資源の積極的な利用

(10) 豊かな感性と表現

- 〇表現のための基礎的な技能獲得
- 〇心を動かす出来事に出会う場の設定
- 〇色・形・音等の美しさや面白さに対する感覚を養う活動設定
- 〇様々な素材に触れる活動設定
- 〇自分なりの表現をする喜びや楽しさの共有

5歳児の主な活動(〇活動例)

小学校生活科の主な単元構成(〇単元名)

春の生き物を見つけよう

- 〇虫をさがそう
- 〇春の草花を集めよう

水・砂泥・しゃぼん玉で遊ぼう

- 〇水鉄砲
- 〇プール遊び
- 〇砂遊び

秋の自然を見つけよう

- 〇どんぐり集め
- 〇落ち葉プール

冬の自然遊び

- 〇雪遊び
- 〇雪合戦
- 〇そり滑り

【歌】チュウリップ、【歌】手のひらを太陽に、【体操】エビカニクス、【歌】田村市民の歌

〇主体的に学び、表現できるための環境構成に込められた教師の意図

- 〇身近な自然に目が向けられるように、園内外の自然に触れる時間や機会を確保する。
- 〇生活に見通しがもてるように、時計を見ながら行動できるよう視覚的に掲示を工夫する。
- 〇子どもが個性を発揮できるように、共通の目的で取り組む活動や行事で試行錯誤しながら友達と協力する場面を称賛する。
- 〇小学生との交流を通して就学への期待を膨らませることのできるよう、掲示物や遊びのコーナーを設定する。
- 〇卒園に向けて、自分の成長や友達との成長に気付いたり、一緒に遊んだ友達やお世話になった人々へ感謝の気持ちをもったりできる活動を設定する。
- 〇年長児としての役割をやり遂げた充実感や喜びを分かち合うために、これまでの園生活を振り返りながら、認める場を設定する。
- 〇活動への意欲向上のため、目的をもって遊ぶ姿を認めたり励ましたりする。
- 〇卒園に向けて、自分の成長や友達との成長に気付いたり、一緒に遊んだ友達やお世話になった人々へ感謝の気持ちをもったりできる活動を設定する。
- 〇年長児としての役割をやり遂げた充実感や喜びを分かち合うために、これまでの園生活を振り返りながら、認める場を設定する。

◆家庭との連携 ☆学校運営協議会との連携

- ◆家庭での様子や保護者の願いを聞いたり、園だよりやドキュメンテーションなどで園の生活や遊びのねらいを伝えたりすることで、相互理解を深め、相談しやすい関係を構築する。
- ◆緊急時の対応についての共通理解を図り、子どもをともに守る意識を高める。
- ◆活動量が多くなるため、家庭での健康管理について啓発する。
- ◆保育参観や園行事を通して、子どもたちの成長を知らせ共有する場をつくることで、保護者同士、保護者と地域との交流を深める。
- ◆☆小学生や地域の人々との関わりについての活動について情報を提供し、家庭と学校、地域とのつながりに対して意識を高める。
- ◆はぐくみステップを活用し、学校への心構えや準備について話をすることで、食事や睡眠、排せつの大切さについて再確認をする。
- ◆保護者懇談会、学年だより等で「架け橋期カリキュラム」について伝え、理解を得る。
- ◆☆緊急時の対応についての共通理解を図り、子どもをともに守る意識を高める。
- ◆生活のリズムを整えることやメディアコントロールの必要性を伝え、理解と協力を得る。
- ◆友達関係でのトラブルに対しては、事実を丁寧に説明し、今後の生活にどのように活かしていくかという共通の視点をもって指導にあたることへの理解を得る。
- ◆家庭での学習習慣の大切さについて話し、自分で学びたいことを決めて継続する大切さについて理解を得る。
- ◆進級に向けて、保護者懇談会、学年だより等で1年間の成長を振り返り、家庭でも称賛してもらえるよう協力を得る。
- ◆生活(就寝や起床時刻)、家庭学習の習慣や時間を振り返り、自分で決めた時間を目標に、生活することができるように協力を得る。

保幼小中一貫教育に係る取組	情報共有(〇〇会議)	運動会(幼小合同運動会)	就学相談(幼小連携会)	◇教育面談	第〇学校運営協議会
地域との関わりで経験させたい活動・遊び	むかしあそび会				

別添1

架け橋期のカリキュラム(就学前施設)

架け橋期のカリキュラム(小学校)

		就学前施設名	おだか認定こども園											小学校名	小高小学校						小学校2年生～				
共通の視点	月	0歳～	5歳児											小学校1年生											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
南相馬市の期待する子ども像		あそびで育つ 学びの基礎 (自分の思いを伝える)											幼児期で培ったものを基盤に学習意欲へ												
		【幼児期が目指す子ども像】○様々な環境に関わる中で豊かな感性が育まれ、色々な表現で伝えようとする子ども ○自分を大切に、他者と共感しながら育ちあう子ども ○自分で考え、自分の思いを伝えることの出来る子ども R8重点目標【友達とつながる】～思いが通じ合う喜びを感じる～											【小学校1年生の目指す児童像】 ○自分のことを自分で伝えられる子ども ○状況にあわせて、自分で考え、行動できる子ども R8重点目標【YOU CAN DO IT, DO YOUR BEST】												
発達段階を踏まえた先生のねがい		○ありのままの自分を受け止めて認めてもらいながら、個々の強みや興味を尊重した活動をとことん楽しむことが出来るようになる ○健やかな体で安全で快適に生活するために、常々今何をすべきか、どうすれば良いのかを考え選択出来るようになる ○遊びや生活の場で経験してきたことをもとに、主体的・自発的に活動し、工夫したり挑戦出来るようになる ○自分なりの表現で人やものとかかわる経験を積み重ねることで他者とコミュニケーションを図り協働する力がついていくようになる											○知・徳・体・コミュニケーションのバランスの取れた「生きる力」を育むことを目指し、発達の段階や特性を踏まえ、資質・能力の三つの柱の育成がバランスよく実現できるようにする。 ○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにする。 スタートカリキュラム (入学後、1ヶ月程度) 【幼児期の教育を通じて身に付けたことを生かしながら】 ・生活科を中心とした総合的・関連的指導 ・個々の発達や強みを理解し、ひとり一人に合った配慮 ・児童が自然な形で意欲的に学習に取り組めるような → ・1単位時間が45分となるように段階を追って実施(発達段階及び学習内容に応じて臨機応変に実施) ・各教科等の年間授業時数を確保												
◎期のねらい ☆具体的な活動内容		1期 ◎進級した喜びを感じながら、様々な活動をやってみようとする。 ☆入園式 こどもの日祝い会	2期 ◎自分なりの目的をもって、試したり工夫したりしながら、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ☆七夕会 夏祭り 水遊び・プール遊び	3期 ◎友達と互いに思いや考えを出し合い、力を合わせて遊びを進めようとする。 ☆運動会 遠足 さつまいも掘り	4期 ◎自分たちで考えたことを遊びの中で実現したり表現したりする楽しさを味わう。 ☆おたのしみ会(発表会) クリスマス会	5期 ◎友達と考えを出し合いながら遊びや生活を進め、やり遂げる喜びと充実感を味わう。 ☆学校探検 節分 ひな祭り 修了式 小正月 餅つき お別れ遠足	【ねらい】 学校生活を知り、友だちや先生との信頼関係を築く。 ・学校探検 ・体育館遊び ・給食当番・清掃活動 ・方部児童会 ・1年生を迎える会 ・健康診断 ・運動会	【ねらい】 友だちや先生との信頼関係を深め、安心して学校生活を送る。 ・5歳児との交流活動・避難訓練 ・鑑賞教室 ・遠足 ・学習発表会 ・マラソン大会	【ねらい】 1年間を振り返り、2年生への進級に向けての期待感をもつ。 ・1年生さよなら会 ・6年生を送る会 ・なわとび記録会 ・カルタ大会 ・修了式																
配慮事項	先生の関わり	○子どもたちが自分を様々な形で表現しそれを受け止めていくことで、幼児期の学びの基盤となる安心感と信頼関係を築く関わり ●子どもの「なんで?」「やってみよう!」という興味や疑問を持つことを大切にすること ◎子どもが表現したことを肯定的に受け止め、友達同士の見合う・聞き合う経験を作ることで自己肯定感を高められるようにする ☆子ども同士の学び合いを促せるように、ペアや小グループで話し合ったり助け合える工夫や対話が生まれる距離感を大切にすること ☆子どもが考えたり迷ったりしているときに、保育者が先回りせず考える時間を確保し、選択の瞬間を尊重する関わりをする。 ●自分の思いを表現することを大切に、言葉を補いながら自分の言葉で伝えられるようにする。また、みんなで話す時間の中で自分の思いを出していることを肯定的に受け止められることで、友達の話にも耳を傾けて聞き、友達の話にも気づいていけるようにする。											【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】 ①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い						○子どもひとり一人の発達の様子を円滑な引き継ぎで出来る限り理解し、新しい環境での安心と信頼の土台作りを行う。 ・名前を呼ぶ、笑顔で答える、詳細な子どもの変化に気付く ●「遊び中心の生活」から「学び中心の生活」のギャップを滑らかに繋ぐよう配慮する。 ◎対話を通じたことばの育ちを意識し、「考えを引き出す問い」や「リフレクション(振り返り)」を意識する。 ★学習内容が自分の生活や体験と関係があることを意識させながら身近なものとして学びが深められるようにする。 ☆主体的な学びを進めていくため、遊び・考え・試す経験を保障し、十分時間をかけながら対応していく。 ●初めての活動に対して主体的に取り組んでいけるよう、園での経験を生かして話し合いをしながら児童と一緒に決めていけるようにする。 ○「先生は自分を見てくれる」「失敗しても大丈夫」「困っているときは助けてくれる」と感じられる安心感を早期に築くことが出来る環境を整える。 ○学級のルールは「禁止」ではなく「安心して過ごすための約束」として共有する。 ●遊びの延長線上に「学び」を感じさせる活動(例:生活科の探求や観察) ●手を動かして考える活動(ブロック絵カード・手あそび) ●一斉指導だけでなくペアやグループ活動で対話の型を身につけられる環境 ◎「どう思った?」「どんな感じがした?」など感情も含めた問いかけや、ペアで伝え合う→全体共有の順で話す安心感を育てる。 ★生活科や国語での題材を自分事として捉えられるよう日常と関連付ける。 ★家庭との連携を意識し「うちでも話してごらん」と家庭学習とつなげていく。 ☆どっちにしようかな?と迷う時間を保障し選ばせる。 ☆成功も失敗も学びとして位置づける。						
	子どもの学びや生活を豊かにする環境構成	○ひとり一人の存在を受け止めるまなざしや雰囲気。○保育者同士の温かなやりとりを子どもたちが感じられる環境(空気感) ○自分の居場所がわかる・生活に見通しがあるなどの物理的な安心を作る環境 ○一貫した生活リズムを作ることで子どもたちの安定感を得られる環境 ○クラス全体の話し合いだけでなく安心して話せる小集団・ペア活動の時間を設ける○評価より「嬉しかったね」「そう思ったんだね」など共感の言葉かけにする ●触れて確かめられる季節の自然物や身近な道具(虫眼鏡・磁石・様々な空き容器・鏡など) 遊びの延長線上で実験や観察に発展できる環境 ●つばやきを拾う保育者の姿勢や失敗をしても責めず、「やってみよう!」と自分で試す機会を増やす ●自分で試行錯誤を楽しむ十分な自由活動時間を確保することで、一瞬で芽生える子どもたちの興味を深めていける配慮と環境 ◎表現の多様性を保障し、自由に絵画・音・身体表現を展開できるコーナーや素材に触れて使いたいと思えるオープンな環境 ☆子どもが選択できるよう、活動・遊び・道具など配置し、「自分で選んで自分で戻す」仕組みを作り、子どもの主体性の中に生活のルールも入れていく。																							
園で展開される活動/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構成		○自分の生活に必要な生活習慣を自ら身に付け、その大切さを理解して行動出来るようになる⇒生活習慣が自立し、自信をもって生活する ○主体的な活動を通して自信を高め、自己を十分に発揮する⇒満足感や達成感を十分味わい、就学に期待をもつ(お別れ会・修了式) ○身体全体を供応させる動作を楽しむ⇒全身運動がなめらかになり、積極的・積極的な運動をする(なわとび・とびこ・鉄棒・ダンス) ○自分の思いや考えを伝え、相手の話を聞き自分とは異なる思いや考えに気付く ⇒友だちの意見に共感したり、言い合ったりしながら調整し、仲間との関係を深める(行事に向けた話し合・毎日のミーティング) ○数量、図形、時間に興味をもち、生活や遊びの中で使う機会を増やす⇒日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を高める(学校ごっこ・サンタクロースへのお手紙・友達への年賀状・母の日父の日などのメッセージ・行事のプログラム・招待状作りなど) ○身近な自然やものを五感で感じ取り、思ったこと想像したことなどを、様々な方法で表現する(野菜の栽培・生き物を飼育) ⇒様々な知識や経験を生かし、創意工夫しながら、遊びを発展させる(水あそび・花を使った色水・どんぐり遊び・氷・雪遊び)											道徳教育 ・生きることのすばらしさを知り、生命を大切にすること。 ・身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること。 各教科等の学習・生活(小学校生活や教科等の学習に興味・関心をもち、主体的に関わる) <生活>みんななかよくなりたいな はじめまして がっこう <図工>どうぞよろしく <算数>なかよしあつまれ <生活>はなをそだてよう <国語>おおきくなつた <算数>かたちあそび <図工>はこでつくったよ <国語>いいこといっぱい一年生 <生活>1ねんかんをふりかえろう <算数>なかよしあつまれ						○生活科を中心に、時間を弾力的に取り扱い、総合的・関連的な指導や弾力的な時間割を設定する。 ○個と協働を往還する児童同士の学び合いを重視し、試行錯誤しながら実感を伴った理解を深めることができるような単元構成にする。 ・学校行事や事前練習 ・生活科の授業(秋を見つけよう) ・体育科の授業(一緒に縄跳びをしよう)						
子どもの交流		1年生徒の交流 5月(親しみを持つ) 1年生との園外活動10月(自然に触れ合う) 夏の水遊び7月(工夫したり、試したりする) 自然物を使った遊び11月(お互い楽しんでることを伝え合う) することを繰り返す)											・入学式 ・授業参観、学校公開 ・個別面談 ・運動会 ・学習発表会 ・なわとび記録会 ・就学時健診												
家庭や地域との連携		年間を通して1年生との交流の機会に地域の方や園児、生徒の祖父母の参加を募り、一緒に交流する 保育参観 引き渡し訓練 就学時健診 入園説明会 高齢者施設訪問 敬老会参加 園舎解放 運動会 修了式																							

※「学習指導要領解説 総則編」より一部引用